

平成24年3月

中川康江 学位論文審査要旨

主 査 兼 子 幸 一

副主査 花 木 啓 一

同 吉 岡 伸 一

主論文

看護学校生のでんかんに関する知識・経験と態度との関係

(著者：中川康江、吉岡伸一)

平成24年 米子医学雑誌 63巻 42頁～55頁

学 位 論 文 要 旨

看護学校生のてんかんに関する知識・経験と態度との関係

てんかんは、てんかん発作を主症状とする慢性の神経疾患である。しかし、様々な偏見や知識不足に基づいて精神病などと誤解され、スティグマの一つとして捉えられてきた。てんかんをもつ人の社会参加を促進し、てんかんに対する偏見、スティグマを打破するため、てんかんが社会でどのように理解され、てんかんをもつ人に対する態度に影響しているかについての研究が今日まで実施されてきた。看護学校生は、卒業後、多くが看護業務に従事し、てんかんをもつ人に接する機会も多い。そこで、本研究では、看護学校生のてんかん教育についての示唆を得るため、てんかんに関する知識と経験、およびてんかんをもつ人に対する態度について調査し、てんかんの知識や経験、態度が学年間で異なるか否か、態度に及ぼす知識や経験の影響について検討した。

方 法

対象は、鳥取県内にある3年過程の看護専門学校3校の看護学校生287名とした。調査は、無記名自記式調査票を用いた。調査票は、学年、性別などの一般的属性のほかに、てんかんに関する知識や経験として、「てんかんについて聞いたことがあるか」、「てんかんに関するものを読み、見たことがあるか」、「てんかんの講義あるいは授業を受けたことがあるか」、「てんかん発作が起こった人に対する対処の仕方を知っているか」、「てんかんをもつ人を個人的に知っているか」、「てんかん発作を実際に見たことがあるか」の全6項目に加え、てんかんが起こる原因やてんかん発作の症状について尋ねた。また、てんかんをもつ人への態度として、「自分自身がてんかんをもつ場合、他人に気軽に話せるか」、「友人がてんかんをもつ場合、どのように振舞うか」、「恋人がてんかんをもつ人である場合、人前でどのように振舞うか」、「てんかんをもつ人と自分の子が一緒に遊ぶことをどう思うか」、「てんかんをもつ人と自分の子供が結婚したいと言われたらどう思うか」、「てんかんをもつ人が、職場で働きたいと申し出た場合、どう思うか」の全6項目のほかに、てんかんに対するイメージを尋ねた。集計したデータは、学年毎に単純集計し、知識や経験、態度の学年別の比較、知識や経験と態度との関係について χ^2 検定を用いて、統計学的検定を行った。

結 果

てんかんに関する知識と経験は、てんかん発作の目撃以外、学年が上がるにつれて有意に増加した。また、てんかんをもつ人に対する態度も、学年の上昇に伴い、好意的な態度の割合が増加した。しかし、「てんかんをもつ人と自分の子が遊ぶこと」、「てんかんをもつ人と自分の子供の結婚」など、自分と直接関係する態度については、学年間の有意差はみられなかった。また、てんかんのイメージでは「よくわからない」が8割と多かった。

てんかんに関する知識・経験をもつ学生の方が、てんかんをもつ人に対して、好意的な態度を示す割合が高かった。しかし、「てんかんをもつ人と自分の子が遊ぶこと」、「てんかんをもつ人と自分の子供の結婚」などの態度では、知識・経験をもっている人が好意的な態度を示すとは限らなかった。また、「てんかん発作の目撃」は、2項目でしか好意的な態度がみられなかったが、「てんかん発作の対処法を知っている」学生や「個人的にてんかんをもつ人を知っている」学生では、好意的態度の割合が高かった。

考 察

てんかんに関する知識と経験は、学年の上昇とともに有意に増加した。看護学校では2年生でてんかんについて学習することが影響していると考えられた。しかし、看護学校生は、大学生や一般人と比較すると、「てんかんをもつ人を個人的に知っている」、「てんかん発作を見たことがある」の割合が少なかった。看護学校生が日常生活でてんかんを意識していないこと、てんかん治療が進歩し、発作を生じる人の割合が減少したことなどが関係していると考えられる。また、てんかんに関する知識・経験を有する学生の方が、てんかんをもつ人への態度は好意的であったが、てんかん発作の目撃などの経験は、好意的な態度に必ずしも結びつくとは限らないことが示された。さらに、「てんかんをもつ人を個人的に知っている」学生は、好意的な態度に変化する割合が高かった。

今回、てんかんに関する知識や経験は、てんかんをもつ人に対する態度を概ね好意的に変化させた。しかし、てんかんに対する誤解や偏見を減らすためには、講義を通じての知識だけでなく、治療可能性を含む具体的知識を獲得させ、てんかんをもつ人との直接的な接触体験を増やし、てんかんをもつ人を社会生活者として捉える教育プログラムの改善が必要と考える。

結 論

てんかんに関する知識や経験は看護学校生のてんかんをもつ人に対する態度を好意的に変化させる可能性が示された。教育プログラムの改善については、今後の検討が必要である。